

「故郷」と高野辰之

神村ふじを

今年の冬はことのほか早く、確か11月17日だったと思うが、山形で初雪を観測した。人の話だが、イリ(注)の方ではカメムシが異常に発生し、このカメムシが多い年の冬は雪が多いということらしい。

大雪と生き物の関係という点では、カマキリの卵の位置が叢の高いところにある場合には大雪になるといふ説があつて、それは卵を雪から守るといふ意味からして大いに納得できるので、そのような年はかなり警戒していたにもかかわらず、当て外れになることも結構あつたので、カメムシもなあと思つて見ていた。

ところが、今年のカメムシは当たつた。大当たりである。1月第4週はずつと寒波が居座り、首都圏でも大変な騒ぎになつたが、どか雪の山形になつてしまつた。1月末の段階で、私の住んでいる左沢あてしざわで83センチ、少し離れた山間の柳川で166センチを記録した。北へ50キロほどの大蔵村尉

折は340センチと、青森県酸ヶ湯の330センチを抜いて全国第1位の積雪量になつたのには驚いた。

大雪と大雪の合間を縫つて、信州野沢温泉に小旅行に行つてきた。スキーで有名な野沢温泉村に、スキー客で賑わう蔵王温泉の山形から、スキーに関係なく、しかもスキーシーズンの真っ盛りに出掛けるのは余りに無謀な気がするが、前から気になつていた文部省唱歌「故郷」の作詞者・高野辰之たつのき博士が晩年を過ごした村を覗いてみたいという思いがあつて、咄嗟とつさに出掛けることにした。小旅行はこの咄嗟にというのが大事である。

高野辰之は、1878(明治9)年、長野県下内郡しもの内豊田村(現中野市)に農家の長男として生まれた。父は農業の傍ら、小布施の陽明学者・高井鴻山の塾生として学問を修めた教養人であつた。

斑尾山まだらおの麓で生まれ育つた辰之は、好學に燃える英才として有名であり、ほらにも聞こえる博識に幼なじみらは「ほら辰」と渾名あだなを付けて呼んでいたそうである。飯山高等小学校高等科卒業後、長野県師範学校(現信州大学教育学部)に進学、卒業後、母校・飯山高等小学校に奉職した。辰之は、高等科在学中と教師になつてからの2回、学校近くの真宗寺に下宿をした。この真宗寺は島崎藤村の『破戒』のモデルになつた寺としても有名だったが、辰之はこの寺の三女・つる枝を見初め求婚するに至つた。つる枝の母・よしえは辰之に、「いつか人力車に乗つて山門から入つて来られ

るなら許してあげます」と告げ、将来の出世を条件に結婚を許されたという。

立志勉勵の人辰之は、中等教員国語科検定試験にも合格し、26歳の時、東京帝国大学教授であった上田萬年博士（小説家・円地文子の父）を頼り上京、博士のもとで国語、国文学の研究に没頭することになる。

上田博士を頼りにと書いたが、その関係は明らかになっておらず、向学のためとは言え、教師の職をなげうって妻とともに上京するに至っては、相当な覚悟が必要だったろうし、そもそも辰之の実家が裕福でなければそうもできなかったであろう。

三田英彬の著書には、辰之が学問をしたくて上京したものの、つてもなく職もなくぶらぶらしているときに、たまたま東京帝国大学の小使い募集の掲示板を見て応募したところ採用され、仕事の合間を縫って聴きたい教授の講義を廊下から立ち聞きしノートを懸命に取った。これが度重なって、上田教授の知るところとなり、そのノートの取り方、まとめ方に感激した上田教授が以後聴講を許してくれ、何くれとなく相談に乗ってくれるようになったと書かれている。この話には根拠がなくて伝聞に過ぎないとのことだが……。立身出世の逸話としては面白いが、真偽のほどは分からない。

1909（明治42）年、文部省小学校唱歌教科書編纂委員に選ばれ、日本で初めての音楽教科書『尋常小学唱歌』の編集に携わった。その中に辰之が作詞し鳥取県出身の岡野貞一が作曲した「故郷」「春が来た」「紅葉」「朧月夜」「春の小川」「日の丸の旗」等の唱歌が載っている。この1年後には、東京音楽学校（現東京芸術大学）教授を併任となっている。

明治後期から大正期にかけて、「日本歌謡史」「日本演劇史」「江戸文学史」を書き上げ、近代国文学に大きな功績を残した辰之は、「日本歌謡史」が博士論文として認められ、東京帝国大学から博士号を授与された。

戦争が激しくなった43（昭和18）年、故郷に近い野沢温泉に別荘「対雲山荘」を設け隠棲、斑山と号した。47（昭和22）年1月25日永眠、享年71歳。

このように大きな業績を残した辰之だが、実際のところ世間にはあまり知られてはいない。というのも、戦前の官僚主義というのか国家権力の示威のためなのか、これらの歌は文部省唱歌と一括りに呼ばれ、レコードジャケットにも作者不詳と明記されていた。作者が明らかになったのは、著作権というものが権利の一つとして公に認められるようになって、養子・正巳氏が文部省に著作権の申請をし受理された73（昭和48）年以後のことである。数ある文部省唱歌の作詞作曲者が公になり、唱歌という言葉の響きも懐かしく感じられる頃になってようやく明らかになったのである。

志を果たして

いつの日にか歸らん

山は青き故郷

水は清き故郷

地元の中学校の文化祭で、毎年3年生が「故郷」の合唱に挑戦する。この時期の男女の歌声もさることながら、中3というこの時期、めいめいが進路の問題を抱えている中で、「志を果たしているの日に帰らん」などと歌われたら、いつもぐっときて涙腺が開いてしまう。

立身出世を思い描きながら、つる枝と結婚した辰之。このことが「故郷」の歌詞の源になっていると解する見方もあり、生まれてきたからには出世して身上げることが世の習い。明治期にあつて極めて自然であるとも解される。ところが、立身出世主義が世の習いとも言えない一世紀以上経った今も心が揺さぶられるのは、どこかに日本人的なスピリチュアルを感じる何かがあるに違いない。

北陸新幹線のおかげで東京から飯山まで1時間50分、飯山駅から直通バスで約25分のところに野沢温泉村はある。その村のスキー場の片隅に高野斑山の墓がある。斑尾山の冬の入り日が目に眩しくもやさしい光を放っていた。

頭まで雪の墓石や斑山忌

ふじを

(注) 道から外れた沢沿いの小さな集落

参考文献：三田英彬『菜の花畑に入り日うすれ 童謡詩人としての高野辰之』理論社、2002年
畑 守人『物語 高野辰之』ほおずき書籍、2001年